

塩分と水温に応じたサルボウ (*Scapharca kagoshimensis*) の 濾過速度と生残率の変化

宮本 康・初田亜希子*1

*1：鳥取県西部総合事務所

LAGUNA (汽水域研究) Vol.15, 13-18(2008)

Key Words: *Scapharca kagoshimensis*, filtration rate, survivorship, salinity, temperature

中海産サルボウの生育至適環境を明らかにするために、塩分と水温に応じた本種の濾過速度と生残率の変化を室内実験により評価した。濾過速度は中程度の塩分(18.8~22.0psu)で最大となり、低塩分(9.4psu)で最小となった。なお、水温に関しては、夏季水温(27℃)で最大となり、冬季水温(8℃)で最小となった。一方、生残率に関しては、高水温(31℃)と低塩分(9.4~15.7psu)が組み合わさった条件でのみ、生残率が著しく低下する傾向が認め

られた。中海では一年を通して明瞭な塩分躍層が保たれているが、本実験で明らかになったサルボウにとっての致命的な条件、すなわち高水温でかつ低塩分である条件(水温:31℃・塩分:<12.2psu)は、過去15年間(1990~2004年)において躍層上部でのみ記録されている。したがって、躍層上部にあたる水深の浅い水域は、サルボウの生育に適さないことが示唆された。